

男子学生の不在は女子学生の意識と行動に どのような影響を与えるのか？

—— 椋山女学園大学におけるインタビュー調査を中心に ——

山 田 真 紀

1. 本研究の目的と方法

本研究の目的は、女子大という環境が、そこで学ぶ女子学生にどのような影響を与えているのかを明らかにすることである。女子大の最大の特徴は、いうまでもなく男子学生がいないということである。女子学生は男子学生がいない大学生活をどのように評価しているのだろうか。また男子学生がいないことは、女子学生の意識や行動パターンにどのような影響をもたらすのだろうか。

これまで、女子大が女子学生の人間形成にどのようなインパクトを持ちうるかという研究は、日本では女子大研究とカレッジインパクト研究というふたつの系譜のなかで行われてきた。しかしながら、これらの研究は、お茶の水女子大学や津田塾大学などのエリート大学を対象としており（青井 1988, 天野 2001）、また研究手法も在学生や卒業生に対する質問紙調査によるものがほとんどであった（中西 1998）。これらに対して本研究は、地方都市にある中堅の私立女子大を対象とし、研究手法もインタビューという質的調査法を用いている。なぜなら女子大にはさまざまなタイプの大学が存在し、それぞれの大学が果たしている機能や意味を明らかにしてこそ、女子大全体の存在意義を議論することができると考えるからであり、質的調査法を用いるのは、可能な限り女子大生のリアリティに接近することで、女子大での人間形成のメカニズムを明らかにできると考えるからである。

本論文では、椋山女学園大学で収集したインタビューデータを用いて、「大学に男子学生がいないことを女子学生はどのように評価しているのか」、また、普通に男性のいる場面と比較して、男子学生がいない大学生活において、「服装やメイクの仕方に変化が生じるか」、「行動やパーソナリティに変化が見られたか」という3つの問いを立てて、男性不在の大学生活が女子大生の意識と行動にどのような影響を与えるのかを明らかにしていきたい。

本研究で使用するデータは「女子大サバイバル研究会（通称：女子さば）」が共同で収集したものである。「女子大サバイバル研究会」とは、2000年6月に執筆者と共同研究者である藤原直子（人間関係学部講師）、問題意識を共有する10名の学生（人間関係学部在学生）により結成された。「女子大サバイバル」という研究会の名称にはふたつの意味がこめられている。ひとつは女子大に通う女子大生がどのように大学生活をサバイバルしているのかという意味であり、もうひとつは、今後、女子大が経営的にいかにサバイバルしていくべきかという意味である。そして前者の実態を客観的に把握することによって、後者におけるサバイバルの具体的な方途を探ろうという意気込みが込められている。そのため女子大生の意識と生活実態に肉薄できるように、我々はエスノグラフィック¹⁾な研究手法を用いることにした。これまで本学園

で学ぶ学生104名（2001年8月現在）に対するインタビューのほか「授業中」「放課後」「学食」「スクールバス」などを対象としたフィールドワークを実施してきた。「女子大サバイバル研究会」は2000年6月から2001年3月までを「第一期」とし、2001年3月には『女子大サバイバル報告書』と『女子大サバイバルデータ集』のふたつの報告書を公刊した。そして2001年4月からは新しい学生メンバーを加えて、現在34名で「第二期」の研究を進めている。ここで使用したデータは「第一期」と「第二期」に収集したもののうち相山女学園大学に通う女子大生を対象としたインタビューデータである。また知見の多くは学生とのディスカッションのなかで生み出されたものである。学生の報告書もぜひ併せてご参照いただきたい²⁾。

2. 大学に男子学生がいないことを女子学生はどのように評価しているのか？

女子学生に「実際に女子大に入学して印象はどうでしたか？」という質問をした。その回答のほとんどは、女子大には男子学生がいないという特性に言及しながら、自分にとっての女子大の印象や居心地を表明している。その回答の内容は「肯定派」「否定派」「肯定と否定の混在派」の3つに類型化することができる。それぞれの特徴とその理由づけについて見ていきたい。

①肯定派

《事例1》1年生：高校まで共学

Q：それで、いざ入学してから、どういうイメージをもちました？

A2：全然、何も気にしないで、なんだけっこう楽しいじゃんって。

Q：例えばどういう時に楽しいって思う？

A2：気楽っていうのかな。

Q：それは、女の子だけだから？

A2：はい。

Q：どういうところが気楽だって思う？

A2：男の子と話す時？緊張するから？

Q：うん。そういうことが学校ではないからね、女子大は。

A2：はい。

《事例2》3年生：高校まで共学

Q：女子大に入る前に考えていた女子大ってどういうイメージでした？

A120：嫌！初めはね、やっぱ共学がよかった。(中略)

Q：なんでなんで？

A120：なんかつまんなそうかなって思って。女ばっかだから。あんまりばかなことやる人っていないじゃんね、男の子がしそうな。そういうのがなさそうだなって思ったし。

Q：なんかつまんなさそうみたいなの？

A120：恋がしたいー！みたいな(笑) 女子大だったら出会いないじゃん！って思って。(中略) なんかね、嫌だったね。

Q：じゃあ今さ、実際女子大に通っていてそのイメージは変わった？

A120：変わったっていうかね、違和感が全然なくて、私、結構すんなり、順応してるわーって。居心地いいよ。

男子学生の不在は女子学生の意識と行動にどのような影響を与えるのか？

Q：じゃあ、その恋がしたいというパワーはどこいった？

A120：なんか、話とか聞いてても、共学の人、別に共学だから女子大より彼氏ができるとかそういうのはなくて、できる子はできるし、できない子はできないって思ったし。仮におんなじ授業をとってたとしても、別にそういう深い関係になるってことはないらしいから。話を聞くとやっぱ同じサークル内とか、バイトとかが多くって、あんま学校のつながりってないなって思ってる。

Q：じゃあ、女子大に入る前は嫌だって思ってたけど、入ったら意外と居心地がよかったみたいなの？

A：うん、居心地よかったね。逆に、男がいない方がいいなーって思う。夏とかむさくるしいじゃん！汗臭いし。女の子はそういうことないから、居心地よかった。

《事例3》4年生：高校まで共学

Q：女子大で、居心地ってどう？ 今まで共学通ってたじゃんね、高校まで。

A14：自分としては居心地はすごくいいね。なんかね、変な言い方かもしれんけど、共学ってある意味なんだろう、この年になると、ほら、男女の出会いとかを求めるじゃない？だからこう、普通の学校生活がさ、ある意味、戦い（笑）っていうんじゃないけどさ。

Q：え？共学が？

A14：そうそう、気が抜けんっていうか。気が抜けんっていう感じがするんだけど、女だけだから、なんていうの、ちょっとぐらい失態を見せてもとか（笑）、そういう、なんか甘えというか安らぎ感はあるね。もともと自分がこう異性の友達作るのが得意なほうじゃないから、っていうのも女子大でよかったって思う条件のひとつ。あんまり男の人としゃべってて、こ
う楽しいって思えない（笑）。っていうか疲れる。

女子大の印象を尋ねた学生のうち、半数以上の学生が「男性不在の環境」を肯定的に捉えていた。しかしながら、これらの学生は入学以前から女子大を肯定的に評価していたわけではない。事例1と2は「はじめは共学大学が良かった」「女子大は嫌だった」というように、当初は女子大を否定的に捉えていた。女子大には、「出会いがない」「男子学生特有の行動や考え方に触れることができない」、または単純に、「男子学生がいないとつまらなそう」というイメージがあったためである。しかし、実際に入学してみると、彼女たちは、女子大の環境を「気楽」で「居心地がよい」というように肯定的に評価するようになる。女子大は「男子の視線」を意識したり、「男子をめぐる女子同士の確執」を感じたりすることとは無縁の世界であり、それが女子学生に「安らぎ感」「気楽感」をもたらしている。特に事例1と3の学生が「男子と話す」と緊張する」「男子と話す」と疲れるし楽しいとは思えない」と語っているように、男性との付き合いに苦手意識を持っていた学生ほど、男子学生の不在は心地よい環境として感じられるようである。

②否定派

《事例4》3年生：高校まで共学

Q：ここでの生活の居心地ってのはどうですか？

A8：あ、居心地？ ん、普通です。どっちかっていうと悪いのかもしれない。ん、悪いわけじゃないけどなんとなく、うーんなんだろ。なんか、共学っていうか、普通に男の人も女の

人もいる方が気楽かな、自然というか。

＜事例5＞3年生：高校まで共学

Q：じゃ、女子大は居心地（はどう？：筆者注）。自分にとって。

A6：居心地は悪い、です。

Q：悪いですか？

A6：私はもともと同世代の女の子としゃべるのが苦手で、それよりも男の子とかしゃべった方が楽だから。これはたぶん私のきょうだいが、兄が一人いるから、ちっちゃい頃から兄と兄の友達とかと遊ぶ、男の子っぽい遊びをして遊ぶっていうのが多かったからだと思うんだけど、うん。女の子としゃべるのが苦手だったから、女ばっかの女子大っていうのはちょっと居心地が悪い。女しかいないっていう環境がちょっと嫌だなんて思う。うん。（中略）

Q：あまりここにいて、楽とは思わない？

A3：うーん。楽っていうか。でもそう、女ばっかだから逆に気を遣わなくて楽っていう部分もあって、友達同士の中でもなんか気楽に過ごしてる部分もあるんだけど。今ちょっと友達のグループ、7人グループ、があるんだけど、そん中でちょっとこじれてて、仲が。で、なんか女同士だから、こういう思考回路になってこういう結果が起こるんだろうなっていうケンカなもんだから、男がいたらちょっと違うんじゃないかって思うときがあって。今は学校はそんなに居心地がいいものではない、私にとっては。で、もともと女の子より男の子の方があれだから、あの、女の子ばっかの女子大っていう環境は居心地がいいものではない。スクールバスとかは、ほんと、女の子があんまりギューギュー入ってぎゃーぎゃーぎゃーぎゃー言ってるからすごい、もうなんか今すぐ降りたいくらい嫌。

多くの学生が女子大の環境を肯定的に捉えているなかで、否定的な学生も少数ながら存在する。事例5では「女性ばかりだから気を遣う必要がなくて楽である」という留保をつけながらも、女子だけの思考回路による喧嘩、女子だけの混雑した騒がしいスクールバスに対する嫌悪感を露わにしており、女性だけで構成される環境にかなり否定的である。否定派が根拠とするのは、事例4と5からも読み取れるように「男女いるほうが自然である」「女子だけだと考え方に偏りが生じる」というものや、単純に、「男子学生がいないとつまらない・張り合いがない」というものである。否定派には男性との付き合いに抵抗感がない学生が多く、その背景として事例5のように「男兄弟がいる」ことに言及している学生が多いことも特徴である。

③肯定と否定の混在型

＜事例6＞3年生：経歴不明

Q：じゃあ、なんでそこ（女子大：筆者注）が居心地がいいって思う？

A5：やっぱ、ギャグ。それが思いっきり言えるのが嬉しいんだと思う。

Q：あーそうなんだ。でも、それが男の子の前で言って楽しければいいよね？

A5：あー、うん、そうだね。で、なんか顔とかもさ、なんていうの、すごい笑い方しても大丈夫じゃんね。そうそうそう、すごい崩しても大丈夫じゃんね。それが楽なのかな。それが居心地がいいのかな。（中略）

A5：うーん、確かに気楽ではあるけど、張り合いがないなっていうのはあるんだよね。

Q：あー、張り合いがない。それはどこから、どういうところで思います？

男子学生の不在は女子学生の意識と行動にどのような影響を与えるのか？

A5：本当に女の子ばっかだから、なんか、男の子ともやっぱり関わりたいなっていう気もする。バイトとかしか（関わりがないから。：筆者注）

《事例7》3年生：中学まで共学・高校は女子高

Q：共学がいいなって思う？

A3：思います。

Q：なんで？

A3：（笑）やっぱり。なんなんだろう？あーでも。どうなんだろう。別に女子大でもいいし、栢山は別に女子大なら女子大でもいいと思うけど。また共学だったら、うーん、楽しそうなんじゃないかなーと思って。

Q：なんで？男の子がいるから？

A3：なんかもう男の人がいると、男の人ってなんか羽目を外しそうなのに。それで（女子大は：筆者注）なんかつまらないところもあるかなって。（中略）

Q：女子大の居心地はどう？

A3：うん。いいよ。

Q：なんで？

A3：生理用品とかあけっぴろげに聞いたりして借りれるとかあるし。（中略）何か知らないけど楽。

Q：楽なんだ？

A3：でもなんかやっぱりなんか女子高で女子大とかになると（中略）そこにいきなり異性とかがいったりすると、なんかすごい、違和感を感じて意識しちゃうっていうか。（男性を意識してしまう気持ちが：筆者注）強くなるんだって、中学校の時よりも。それがいやだ。自分で。

Q：緊張する？

A3：うん。別に普通にいるだけで。

事例6や7のように、同一人物のなかに男子学生がいないことに対して「気楽さ」と「物足りなさ」が同居しているという事例も多くみられた。事例6では、男性の目を気にせず、冗談を言ったり大きな口を開けて大笑いしたりすることができることを「気楽」であると考えている一方、「確かに気楽ではあるけど、張り合いがない」と発言しているように、男性との関わりがないことに物足りなさも感じている。事例7は、女子大では男子学生と「羽目を外す」ような行動をともにすることがなく、物足りなさを感じつつも、友達から「生理用品を借りる」ような場面では便利なことも多く、男性の視線を気にすることのない学生生活を「楽」であると感じている。しかしながら、こうした環境に慣れてしまうことで、男性がそばにいないことが不自然に感じられる自分に多少の危機感を感じているようである。

ここまで男性不在の学生生活を女子学生がどのように評価しているかを3つに類型化して概観してきた。男子学生がいないということは、「気楽」であると同時に「物足りなさ」も感じさせる。そして、男性と交流することがあまり得意でない学生にとっては「気楽」である部分が高く評価され、男性との交流を積極的に行いたい学生にとっては、男子学生がいない女子大は「物足りない」と否定的に評価される。しかしながらこの「気楽」と「物足りなさ」は表裏一体の感情であり、どちらを強く感じるかという微妙な違いはあるものの、ほとんどすべての

学生がこの両方の感情を同時に持っていると考えた方がよいだろう。

3. 男子学生がいないことで服装やメイクの仕方に変化が生じるか？

次に男子学生がいないことで、女子学生の行動面に変化が生じるのかを見ていきたい。ここではまず、服装やメイクの仕方に焦点をあてる。女子大は男子学生の視線から解放されており、男子学生をめぐる恋の競争意識も生じえないことから、女子学生は服装やメイクに「手抜きができる」かもしれない。しかしながら一方で、女同士のおしゃれ競争により、服装やメイクにはかなり「気合を入れる」必要があることも予想される。そこで、「男子学生がいないと自分自身に変化は生じますか。もし生じるとするならば、どのようなところが変化しますか。服装や態度に変化は見られるのですか。」という質問に対する回答のうち、服装やメイクの仕方について言及している回答を抜き出し、この点について考察していきたい。

①手を抜ける派

＜事例 8＞3 年生：併設校出身者

Q：共学だったらさ、人目を気にしていたと思う？

A19：なんか共学だったら、絶対すっぴんでは学校に来ないかもしれないし（笑）。

Q：え、じゃあ、梶大とかだったら、もうすっぴんとかで来るの平気？

A19：うん。別に平気。眉毛ぐらいかいてあれば。

Q：ああ。そういうのってさ、服装とかでさ、気遣ってることとかってある？（中略）

A19：基本的にたぶん、変わらないと思うけど、この、自分の好みっていうものに合わせた服とかだと思うから。でも、もしかして共学だったりしたらなんか、女の子っぽい服とか選んじゃうかもしれない。（中略）

Q：そのさあ、女の子っぽい服を選ぶっていうのは、例えばどういう理由で？

A19：どういう理由でだろうかな。なんとなく、やっぱ、こう、男の子と一緒にいると、自分は女だっていうことを、こう、意識するかもしれないから。（中略）なんか全員がさ、女だったら、別になんか、好きなもの着てられるかな。

＜事例 9＞3 年生：高校まで共学

Q：女子大やとさ、男の子いないじゃんね？そういうとこで、なんか、服装とかで気をつかわんですむとか？

A10：ああ、でもそれはある。すごい。うん。やっぱそれは、男の子がおったら、意識するやろうし、結構気が、気が抜けんっていったらおかしいけど、なんか、うん、あの朝とかは、もうちょっとこう、ちゃんとして考えてくるやろうし、組み合わせとか。で、結構時間なくても、髪の毛とか、こう、お化粧とか、今よりはたぶん気にしとったと思う。（中略）

Q：えっ、高校は共学だよな。

A10：教室内に、そうやね、男の子がおったで（中略）こう、なんとなくやっぱ、そこにおられるだけで、なんかこう、向こうは見てないかもしれんのやけど、やっぱそれを意識するし、こっちは。そういう意味では今のほうが、なんか気楽といえば、気楽かなあと思うけど。うん。やっぱ、ちょっと、違うところもあるって感じかな？

事例 8 の学生は、女子大には「すっぴん（＝化粧をしない）」で学校に来ることができるが、

男子学生の不在は女子学生の意識と行動にどのような影響を与えるのか？

男子学生がいれば、化粧はしっかりとしなければならなくなるだろうと考えている。また服装も、女子大であれば自分の好きな服を着ていくことができるが、共学大学であれば「女っぽい服を選んでしまう」かもしれないと述べている。なぜなら「男の子と一緒にいると自分が女であることを意識するかもしれないから」である。事例9の学生も、もし共学大学に通っていれば「気を抜く」ことができず、「髪の毛や服装を気にかけていただろう」と述べている。「男子学生はこちらを見ていないかもしれないが、そこにいだけで自分としては意識してしまう」からである。このように、女子大には男子学生がいなかったため、服装や髪型にそれほど気合を入れる必要がないと考えている学生も多い。さらに重要なことは、「男子学生がそれほど気にしていないかもしれない」と留保をつけていることから、ある環境下（この場合は男子学生もいる共学大学）では、自分が男子学生の視線を内面化してしまうことがあることを、女子学生自らが認識しているということである。

②気合を入れる派

≪事例10≫ 3年生：併設校出身者

Q：なんか、でも私が思うのは共学だったらなんていうん？皆きれいにしてるっていうけど、私的には女子大の方がきれいにしてる気がする。共学の学校とか行っても女子大の女の子のほうが気合い入ってるような気がするし。

A7：それはね。前友達と喋ってたんだけど、何ていうの？女の子同士の目の方がぜったい、

Q&A7：きびしい。

Q：男の子は多分女の子がどんなでも許すっていうか気にしてないと思う。ルーズソックスとかずれてても気にしてないと思うし。

A7：変なところはそうだね、意地を張るっていうか。仲いいんだけど、本当に、ぜったい張り合ってると思う。仲いい子でもこの部分だけはぜったい負けないぞっていう。

事例10では共学大と女子大を実際に比較した経験から、「女子大の女子ほうが気合が入っている」という印象を述べている。なぜなら「女の子同士の目のほうが絶対にきびしい」「張り合っている」と表現しているように、女性同士にこそ、ファッションに関して競争意識が芽生えるからである。

≪事例11≫ 3年生：高校まで共学

Q：じゃ、えー、異性がある場とない場のところでは、自分の中では。

A6：気持ちも違うし、態度とか服装とかでもだいぶ差が出るんじゃないかって思う。そう、女子大、そう、学校とかに行くだけのときは、女だから、服装がすごい簡単とかでもいいやって思うときもあるし。でも、逆に、でもなんか女ばっかで、周りの子がすごいおしゃれをしてるから「あ、私も負けとれん」みたいに思って、女の子っぽい格好とかスカートとか買ったりしたときもあるんだけど。それよりもやっぱり、その、異性に会う時とかの方が、女らしい格好をしてる。おしゃれに気を遣ってるなっていうの、一応男の子と会うんだっていうのが。（中略）「今日は男の子と会う日だ」って思うと、やっぱり女の子っぽい格好、スカートとかをはいたりとか、お化粧したりとか、ちょっとなんか付けたりとかアクセサリーとかつけたりとかするなあっていうのが、変わったなあって思う。

事例11は、女子大では男性の視線がないため「手を抜ける」という側面と、女子同士の視線があるからこそ「手を抜けない」という側面の両方があることをうまく表現している。それは「女だけだから服装が簡単でもいい」という反面、「周りの女子学生がおしゃれをしているので負けてはいられない」という気持ちがあると述べていることに現れている。しかしながらやはり「男の子に会う日」には、女の子っぽい「服装」「お化粧」「アクセサリ」をつけるという。事例12は、女子大の学生がファッションにセンシティブになる理由を考察している。そこには「女性同士の競争意識」だけではない理由が指摘されている。それは、女子大の学生は生活時間の多くを男性不在の環境で過ごすため、もし男性との交流を持とうとすると、大学外での限られた機会を生かすことになる。そのため、女子大生はそのわずかな機会において、自分を最大限にアピールするためにファッションや身だしなみに気を遣うのではないかと指摘しているのである。

《事例12》3年生：高校までは共学

Q：女子大って見た^ま目的にどんなイメージがある？女子大の女の子って。ファッションとか。

A120：キャピキャピしてる。

Q：どうして、それは？

A120：やっぱりなんか、私はあんまりないけど、女の子同士だから逆に「負けないわよ」みたいなところあると思うし、女子大だから当然女の子しかいないわけで、彼氏を作りたいなり、男友達との関係を作りたいと思うなら女子大以外の外でいくわけじゃん。だから、逆にファッションとか身だしなみに気をつかうのかなって思う。

女子大に通う女子学生は、「男性の視線の不在」と「女性同士の視線」のなかで自分のファッションを決定していく。そして日常的には男性と接点をもたない女子大の学生は、男性と関わる場に出るときには、さらに自分の女性性を意識したファッションを選び取ってしまうという傾向があるようである。

4. 男子学生がいないことで行動や態度に変化が生じるか？

ほとんどの学生は、「男性がいると行動や態度に変化が生じるか」という質問に対して、自分自身を含めてほとんどの友人や知り合いには「変化がある」と答えていた。ここでは、普通に男性がいる場面と比較して、男子学生がいない大学では、実際にどのような行動や態度の変化が起きるのかを見ていきたい。学生が語る「自分たちの変化」は、前項において考察したファッションやメイクを除いて、以下の3つに類型化することができる。それらは「普段は隠されている行動が発露するタイプ」「他者との関係性が変化するタイプ」「抑圧されていた本来の自分を取り戻すタイプ」である。

①普段は隠されている行動が発露するタイプ

《事例13》4年生：高校まで共学

Q：やっぱり女子大のいい点って気楽っていうのが一番なのかな。

A16：うーん、なんか教室でも化粧直しとかできちゃうし。

Q：うんうん、できちゃうよね。ご飯食べた後とかみんなしてるよね。食堂とかで。あーそっか。男の子とかいるとあれかな、化粧直しとかトイレとか行ってしたりするのかな。

男子学生の不在は女子学生の意識と行動にどのような影響を与えるのか？

A16：するのかな（笑）。共学のことはわからないから。

《事例14》3年生：高校まで共学

Q：でも眉山に來たから、なんか驚く事はやっぱり多い？

A119：うん、鼻かんだりとか。人前で鼻かんだときは凄**い**びっくりした。

Q：あー。前は？

A119：前は、もう鼻とかかめ**ない**からみんな、押さえて。で、思いぎりかみ**たい**ときはトイ**レ**行**っ**て。

Q：今は、じゃあ、普通に出来るんだ。

A119：今もだめ。今もだめ**なん**だけど。なんかちょっとびっくり。

《事例15》3年生：高校まで共学

Q：高校は共学だった？

A11：共学でしたね。だから、なんか、疲れた時とか、ロビーで、ガッーと寝とったりするし（笑）。やっぱり高校の時は絶対そんなことできない感じ？（中略）やっぱし、さすがに男の人の前で、ロビーの姿は見せられないっていう（笑）。うーん。やっぱし、なんか、あまりにダラダラはできない。なんか、けっこうロビーとかで寝とる人とかおるじゃないですか。だけどそれが、もし男の人が大学で普通にいたら、共学ではできないんじゃないかな。（中略）だから女子大に来て、ああ、こんなことが学校でできるんだっていうのが、すごい、それも、ちょっと、驚いたっていうか、新たな発見、だった。

普段の生活では、女性が公衆の面前ですることができないこと、つまりトイレなどの隠された空間でしかできなかったことを、女子大のなかでは堂々とできることを指摘するものが多かった。具体的には授業中における化粧直し、学食における食後の化粧直し、大きな音をたてて鼻をかむ、生理用品の貸し借り、生理など女性の体について話す、ロビーにあるソファで睡眠不足を補う、などである。事例13と14では、化粧直しや鼻をかむことは、本来トイレですべきことなのではないかと留保をつけていること、また事例14と15が共学高校から女子大に進学してきて、こうした女子学生の行動に驚きを感じていることから、こうしたことは女子大でなければみられない光景であることが分かる。

鼻をかむことができる、人目を気にせず体の不調を話すことができる、などは女子大のメリットとして肯定的に考えている学生もいるが、どこでも化粧直しをすることや、ロビーなどで休息をしていることに対しては、「行き過ぎ」「だらしない」と否定的に捉え、女子しかない環境の弊害であると考えている学生も多かった。

②他者との関係性が変化するタイプ

《事例16》3年生：経歴不明

Q：男の子がいて、楽しい？

A5：なんとなく話の内容とかも変わってくるんじゃないかな。（中略）

Q：女の子しかないときはどんなことをいつも話す？

A5：えー、結構下品になるかも**し**ない。下ネタとかもゆっちゃうと思う。（中略）ギャグに走っちゃうところがあると思う。（中略）笑いをとることが大事っていう、感じになっちゃう

かな。

Q：じゃあ、男の子がいるとそうはならない？

A5：うーん。そうだね。っていうか、なんか女の子ばかりだと、こっちが笑わせようっていう気になるけど、向こうのほうに笑わせてもらってもいいかなっていう気になるかな。うん。(中略)

Q：じゃあ、男の子がいる時ってどんな感じになるかな？

A5：うーん。とにかくあんまりギャグは言わなくなる。適度に、ここまで言っちゃダメだろうっていう。

日常的な人間関係においても、相手によって話題の内容や、「聞き役」や「話し役」などの役割分担が微妙に変わるものである。事例16は女子学生だけの空間では、話の内容が変わる(下ネタやギャグを言うことができる)こと、そして「女の子だけだと笑わせようという気になるが、男の子がいれば笑わせてもらってもいいかなと思う」と述べているように、役割分担にも違いが生じることを述べている。その背景には女性の下ネタやギャグをいうことははしたないという規範意識や、一般的に男性が女性を楽しませる(笑わせる)べきであるという傾向があることが見て取れる。こうした規範意識や傾向が正しいものであるかの評価、またこうした規範からの解放が歓迎すべきものであるかといった議論は置くとしても、女子のみの環境は、こうしたさまざまな男女の役割に関する規範から、一時的に女子学生を解放するものであることが分かる。

③抑圧されていた本来の自分を取り戻すタイプ

《事例17》4年生：高校まで共学

Q：そんな女子大とか、つまらなさそうとか、勉強してなさそうってイメージがあったんだけど、今実際女子大に入ってイメージは？

A16：すっごい楽しくて、居心地がいいのね。というのは、うーんと、積極的に活動したせいもあるんだけど自分が、興味の持ったことにはどんどん挑戦して、で、学校では演劇部に入っただけで、たぶん共学だったら、演劇部なんて、興味はあったんだけど絶対恥ずかしいから入れなかったと思うのね。(中略)やっぱり居心地がいいと思うのは、なんていうの、そういう異性の目がないから、変に自分の事を意識しないでそのままやっていけるっていうか。

Q：思うままに？

A16：やっていける。それは勉強に関してもそうだし、本を、図書館で本を借りるにしても、なんか、すごく、学校の図書館の居心地がよくって、女の子だけで静かだし、皆めいめい好きなことやって、うん、高校のときに結構男の子の目を気にしてたと思うのね、今振り返ると。だからよけい、そういうふうに感じるのかもしれないですけども。

Q：やっぱ図書館とかは違うのかな？高校の？

A16：高校の図書館はね、あんまり、なんかもっと色々な本とかゆっくり見て帰りたいんだけど、なんていうんだろう。そんな、借りてく子がいなくて、借りる子はすっごい極端になんか借りてるみたいなの。だから、入りにくくて、ほんとにすごく借りたかったにもかかわらず、変な見栄をはっちゃって、寄り付かなかった。で、たまに、いったらいったで、なんか、うーん、派手な子達がワーワー騒いでたりする場所で、なんかやんなっちゃって、そそくさって去っていくような。(中略)

男子学生の不在は女子学生の意識と行動にどのような影響を与えるのか？

A16：（＊＊ちゃんは：筆者注）のんびりしてるねとか、大学入ってから言われたことないのね。それが不思議なんだけど、だから、よけい、なんか自分らしくいられるっていうか。

Q：周りの自分を見る目が違う？

A16：違う。自分よりものんびりしてるなっていう子に会う時もあるし。なんか、今まで持ってたリキミが取れたっていうか。すごいそれはある。

Q：ふーん。あっ高校は共学？

A16：うん。そ。高校までずっと共学。幼稚園から。

Q：幼稚園から。じゃあ、女子大の居心地がすごくいいっていうのなんだけど、それはどうして？

A16：うん、そうだね。なんかね、私がなんかそういう、なんか男の子からね、「そんな事やっちゃダメだよ」って言われる事が結構あって、すごい下ネタの漫画とか借りてると「読んじゃダメだよ」とか。「なんで？」とか思いつつ、でも、読んじゃいけないって言われるとなんか気になるし。なんか、やらしい人って思われるみたいじゃない？でも、皆は読んでんだよ。普通に。なんか、イメージじゃないねとか。なんか、結構男の子からそういうの押し付けられた。自分は押し付けられるって受け止める事が多くて、内面は全然、うーん、なんていうんだろう、男っぽいくらいなのに、がさつだし、なのにすごくね、外見的におとなしく見られる事があるみたいで、それを、すごく男の子から言われたから、それが気になっちゃって、だから、中学でも高校でもなんか、そういうふうなイメージがあったら、そうしてなきゃいけないのかなっていうのが、無意識と意識的、よくみられたっていうのと、両方働いていたように思う。うーん、なんかすごく消極的だったと思う。

Q：で、女子大ではもう積極的に？

A16：うん。もう積極的に、うん。そしたら、どんどん自分の世界が広がっていったから、それが、すごい発見で、で、それに気づいて、ますます居心地が。

Q：良くなってくる？

A16：うん。高校でも女子校すればよかったなぁーぐらいかな。

事例17は女子大で4年間を過ごすことによって、本来の自分を取り戻したという事例である。高校までは「男子の目を気にしていた」「変な見栄を張っていた」「男の子から自分のイメージを押し付けられた」と述べているように、男子がいることによって本来の自分の姿を出すことができなかった。例えば、高校時代、図書館で本を借りたかったにもかかわらず、図書館で本を借りるのは極端な子（＝オタクっぽい子だと推測される）であり、また図書館は派手な子の溜まり場にもなっており、そういう子と自分は違うということを示すために図書館には近づかないようにしていた。また、男子から「おとなしい子」だというイメージを押し付けられ、下ネタの漫画を読むなど、そのイメージに合わないことをしているとたしなめられたりしていた。そして、そうした外側から押し付けられたイメージに「そうしなきゃいけないのかな」という漠然とした気持ちと、「男子からよく思われたい」という気持ちから従っていたという。しかし女子大に進学してからは「自分らしくいられる」「異性の目がないから変に自分のことを意識しないでいられる」「今まで持っていたリキミが取れた」と述べているように、「自由」に「積極的」に自分らしく生活できるようになった。こうした学生生活が楽しくかつ居心地がよいという。

多くの場合、我々は大切な他者からの期待（例えば親・教師・異性からの期待）に応えよう

とするものである。こうした傾向は優秀な女子生徒に強いといわれている (Kerr 1985, 訳本 1992)。思春期を迎える女子生徒にとって、男性からの視線は無視できないものである。そしてその視線や期待が、自分本来の姿とは異なっている場合、彼女のなかで葛藤が生じ、事例17のように、周囲が期待するイメージに自分を合わせることで、本来の自分を押し殺してしまうこともある。多くの場合、女子生徒が感じ取る異性からの期待は、男性の「女性にはこうあってほしい」という願望を反映したものである。そうであるならば、女性だけの空間は、女性が本来の自分を発見し、自分らしく生きていくための礎を築くための重要な場を提供していることになる。

5. 本論文の結論

本論文では、女子大という環境がそこで学ぶ女子学生にどのような影響を与えているかを、学生に対するインタビューから探り出すことを試みた。女子大の存在価値を考えるうえで重要なのは以下の3つの知見である。

第一に、女子大に通う学生は、男子学生がいない空間のなかでアンビバレントな状況に置かれている。例えば、男子学生がいないことを気楽と捉えながら、同時に物足りなさも感じている。また、男子学生がいないことからファッションに手抜きをすることができるように感じながらも、同性同士のファッション競争のなかで、また学校外での数少ない男性との接触において自己をアピールするために、ファッションや身だしなみに気を遣っている。このように、男性がいないという空間のなかで、学生は相反する感情や価値を同時に感じているのである。

第二に、男子学生がいないことは、実際に女子学生の行動に違いをもたらしている。男子学生がいたらできないこと、例えば、大きな口を開けて大笑いすること、下ネタで盛り上がること、ロビーで睡眠不足を解消すること、授業中や食後の学食で化粧直しをすること、大きな音で鼻をかむことを、女子大ではすることができる。そして「どうしてそれが女子大でできるのだろう」と考えたときに、自分たちが知らず知らずのうちに「女性是这样あるべき」という規範に従っていることに気づくのである。またこうした行動を「行き過ぎ」「だらしない」と否定的に捉え、女子大の弊害であると捉えている学生も多い。こうした学生たちは、女性だけからなる環境において女性の行動が変化すること、そしてそれを否定的に感じる経験をすることで、我々が従ってきた規範について、「女性として守ることを押し付けられている規範」と「人として従うべき規範」の区別を考えるなど、批判的に検討する機会を持つことになるのである。

第三に、男子学生がいない環境は、女子学生に、自分が男子学生の視線や期待を内面化してしまう場合があることを意識化する機会を与えている。思春期を迎える女性には、男性の視線や期待を無意識のうちに感じ取って行動してしまうことはよくあることである。そして常に男性がいる環境で過ごし、同性のみでいた経験がないと、この事実気づくことは難しい。女子大のように、女性だけで構成される一種特殊な環境に身を置き、肩の力が抜ける思いをしてはじめて、自分がどれだけ他者（特に男性）の視線や期待を内面化していたか、そして本来の自分の姿とはどういうものかが分かるのである。

これらの知見は、女子大という空間が、それが意図的であれ無意図的であれ、女子学生にジェンダー・センシティブになる環境を提供していることを意味している。つまり普段の生活では意識することが難しいこと、つまり「女性としてふさわしい行動」が社会的に決められていること、男性からの視線や期待を内面化し、時には本来の自分を押し殺して行動することがある

男子学生の不在は女子学生の意識と行動にどのような影響を与えるのか？

ことを意識化できる環境なのである。

各大学においてジェンダー教育を行うかどうかは、その大学のカリキュラムによる。しかしながら、男子学生がいない環境それ自体が、女子学生にジェンダー・センシティブになる機会を与えているということは、今後の女子大の存在意義を考えるうえで無視できないことであろう。

【謝辞】

本研究を進めるにあたり椋山女学園大学の教職員、学生の皆さんに快く調査にご協力いただきましたことを心より御礼申し上げます。この研究は「女子さば」メンバーの学生の熱心な調査と討論に多くを負っており、またデータの共有も快諾していただきました。また本論文執筆にあたり、共同研究者の藤原直子さんには分析・内容・文章に対して有益かつ細やかなアドバイスを頂きました。「女子さば」メンバーの一人ひとりにこの場を借りて感謝の意を表します。

* 女子さば第一期生：東暢子 小川奈保子 小田由美子 加藤由貴 川上志野 清水郁名子
下村真子 田村桂子 深瀬志穂（50音順）

* 女子さば第二期生（2001年9月現在）：早川祐子 山上春奈（以上の学生の収集したデータを論文中に引用させていただきました。女子さばはこの他28名から構成されています。）

【注】

- 1) エスノグラフィという言葉は、フィールドワークやインタビューなどの質的な調査方法を指す場合と、これらの質的な調査から明らかになったファインディングズを論文としてまとめたものを指す場合がある。
- 2) 本論文と関連のある学生の論文として、小川奈保子「女子大はお好き？－女子大評価の根底にあるもの－」（『2000年度報告書』に掲載）がある。この論文も併せてご覧いただきたい。

【参考文献】

青井和夫（編著），1988，『高学歴女性のライフコース：津田塾大学出身者の世代間比較』勁草書房。

天野正子（他），2001，「国立女子大学出身者のライフコース・性差意識・大学将来像」『日本教育社会学会第53回大会発表要旨集録』234-239頁。

Kerr., B. A., 1985, *Smart Girls, Gifted Women*, Ohio Psychology Press.

（訳本 清水久美訳，1992，『才女考：〈優秀〉という落とし穴』勁草書房。）

中西祐子，1998，『ジェンダー・トラック：青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社。